

まなほ

このページは男女共同参画についての学びを深めようということから企画されているページです。



2014年12月30日、作家 宮尾登美子さんがこの世を去った。彼女のドキュメンタリー番組に接して「作家・宮尾登美子」に興味を抱いた。作品の多くは映画・舞台・テレビドラマになって、運命にあらがう力強い女性の姿が数多く書かれている。彼女の生き方そのものがその源流にあるのだろうか。今年には終戦後70年の年である。宮尾登美子もまた、敗戦により地獄の苦しみを味わったひとりである。戦時中17歳という若さで結婚・出産、乳呑児を抱えて開拓団の一員として満洲へ渡ったが、間もなく敗戦、異国の地で味わった飢えと恐怖はいかばかりか？生と死の惨状に直面した戦争体験は彼女にとって作家を志す原点となったという。今回は宮尾登美子の生き方に学ぶ。

作家・宮尾登美子さんの生き方

○ 生い立ちの秘密

12歳のときに自分の生い立ちを知る。女衞（ぜげん・芸妓娼妓紹介業）の父と愛人の間に生まれた子だということを知り、人にも隠し、一生の恥としてきたが、後にこれを書くことが自分の使命だと思うようになる。世の中は父の仕事をさげすんでいたし、父への憎しみが大きかった。

○ 結婚・出産・離婚

女学校を卒業した登美子は東京の大学に無試験で合格したが「女に学問はいらない。生意気になるだけだ」と父は進学を許さなかった。国民学校の代用教員として働いたときに同僚に求婚され、結婚を決意する。父への憎しみから逃れるように。親子3人の満洲での避難民としての暮らしは350日にも及んだ。次々と同胞が死んでいく悪夢のような光景だった。ようやく乗った引揚げ船の中でもたくさんの人たちが死んでいった。「死にたくない、死にたくない」という思いだけで佐世保の山を見たという。たどり着いた夫の実家では慣れない野良仕事で結核になり、「自分は死が近いのでは？」と感じた。自分の娘に何かを残さなければという思いから、昭和22年6月18日、日記を書き始める。書くことで病も癒され、昭和26年からは職業婦人として保母の仕事に就く。そこで非凡な才能を發揮したという。昭和37年には婦人公論に応募した「連」で女流文学新人賞受賞。そして翌年、夫との決定的な別れがやってくる。初めて頭を強く殴打された登美子は100円玉を握りしめたまま1月の雪の中へ飛び出し、家へ帰ることはなかったという。2ヶ月後に離婚。

○ 再婚・破産・夜逃げ

離婚後、高知市に居を移し、新聞に連載を書き、テレビやラジオの脚本も引き受けた。執筆活動に精を出すようになる。昭和39年には高知新聞の記者と恋に落ち再婚。その後、手を広げた事業に失敗して破産、夫と2人逃げるように故郷を後にする。東京へは亡くなった父が連れてきたのだという思いがあった。そこにはふつふつとたぎる文学への思いと広辞苑一冊があった。

○ 書くことへの執念・自費出版・太宰治賞・直木賞

女流文学賞を受賞後の10年間は何度も自分の才能に見切りをつけたという。原稿は幾度となく突き返される。作家とは孤独と絶望との闘いだという。転機は昭和46年の3月、自費出版した「櫛」が太宰治賞受賞。6年後には「一絃の琴」で直木賞。遅咲きの女流作家宮尾登美子の誕生である。

宮尾登美子の生き方に共感した。旧満洲からの引き上げの話はテレビだけではなく、自分の親族からも聞くことがあった。涙なくしては語れない、聞けない話である。先輩方の辛い体験を胸に刻み、ぶれない生き方をしたいものだ。

